



短角牛に新しい価値を 世界へ羽ばたく製品開発

盛岡市

岩手革

岩手県北地方で生産される短角牛。赤身肉人気の高さに反し、現在その生産数は減少傾向にあるが、新しい切り口で短角牛を発信していこうと立ち上がった会社が盛岡市にある。

誰よりも短角牛の魅力に惚れ込んだ中村俊行代表が目をつけたのは、短角牛の肉ではなく皮だった——。

世界に通用する純国産レザー製品を開発

岩手を代表するブランド牛として近年注目を集める短角牛。夏山冬里という独自の放牧方式で育てられ、赤身の多い肉質が「牛肉本来の味を楽しめる」として県外の名だたるシェフたちを魅了する。この短角牛の「皮」に新たな価値を見出した企業が、盛岡市に事務所をおく「岩手革」。平成28年に創業したばかりだが、代表の中村俊行さんの思いは熱い。

「革製品は『国産レザー』と表記しても、海外の牛革を輸入して日本でなめしている。サシが売りの黒毛和牛の皮は伸びやすく、革細工には向かないんです。でも短角牛はイタリアの牛に近い肉質だし、自然放牧で育てられる点も共通する。あのイタリアンレザーにも匹敵する純日本産の革製品作ることができると確信しています」。

そんな中村代表が短角牛と出会ったのは、ツーリングで訪れた早坂高原で。「道のど真ん中にいて驚いた」と笑う。その1年後に焼肉店を開業、取り扱いを始めたが思うように短角牛は売れなかった。ちょうどその頃、取引があった豚肉生産者が採算がとれず廃業することを知り、「自分が使わなければ短

角牛も消えていく」と一念発起、皮革商品の開発に乗り出したのだ。

だが、皮の調達ひとつとっても前例のない事業である。苦労して牛一頭分の皮を仕入れ製品開発に着手、しかし同社の製作部長で八幡平市で皮革クラフト(革製品)を製作している工藤尚史さんをしても短角牛は初めての素材だったという。

「岩手革というブランドを確立し、生産者自身が誇りを持って末長く働き続けられるような農業を作れば若い移住者ももっと増えるでしょう。こんな素晴らしい牛が日本でも作られていることを伝えたいし、この牛を育てたいという人が出でくれたらなお嬉しいですね」。

代表
中村
俊行



- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

①事務所は盛岡市に置き、製作は八幡平市にある工藤さんの工房「4358」で行う。②独学で革細工を学んだ工藤さん。「技術で彼の右に出る者はいない」と中村さんも絶賛する。③名刺入れのために特注した抜き型。④工房には工藤さんの作品も数多く並ぶ。現在の岩手革のラインナップに加え、今年中にキーケースやクラッチバッグも登場予定という。⑤主に使用するのは岩泉産短角牛。台風被害からの復興も応援する。

岩手革の技術

長財布は縦10cm、横19cm、マチ幅2cm。滑らかな肌合いと使う込むほどに風合いが増していく。カラーは赤、黒、ベージュの3色。デザイン性の高い松嶺貴幸コラボ品は若者に人気だ。同社では短角牛の皮の仕入れの際も個体識別番号を把握して導入、牛の月齢の違いや背中・腹皮など素材の性質を生かして製品を作る。



岩手革の技術

短角牛の一枚皮を贅沢に使用した、工藤尚史さんデザイン・製作の名刺入れ。皮を折り畳んだようなデザインながらポケットは2つ確保され、縫い目の一切ないシームレス仕様のため使う人に合わせて収納力を変えられる。型抜きで作るため口は非常に大きいが「孫の代まで使えるような一生物の革製品を作りたい」という思いから開発。



いわて産業振興センター活用事例

平成28年度「いわて希望ファンド地域活性化支援事業」の採択を受け、製品の企画開発に着手。その製品をひっさげて「いわて特産品コンクール」へエントリー、知事賞を受賞している。

企業データ

会社名 岩手革
本社 岩手県盛岡市下太田下川原65-2
電話 019-613-5130
代表者 中村俊行

CORPORATE DATA
創業 平成28年10月1日(2016)
従業員 5名
業種 革製品の製造販売業
URL <http://iwategawa.jp/>